
雪のリズムに囲まれた地の獄。

蟻塚つかっちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪のリズムに囲まれた地の獄。

【Nコード】

N3028V

【作者名】

蟻塚つかちゃん

【あらすじ】

何が彼を苦しめるのか。地獄？白い雪？それとも自分の罪悪感？

（前書き）

救いとは何だろうか。地獄とは？人間にはきつとまだ早い概念なのだろう。小松左京氏に捧げる。

悠揚^{ゆうよう}迫らず、といった感じで彼女——地獄^{じごく}原力ナコは言った。

「あなたは地獄行きです」

これが物語の始まりであった。

——それは十五年も前のことだった。

○ 男——どこにもいるような個性の欠片もないような男——金原^{かねはら}サトシは、自宅のアパートからつんのめるように駆け出して、逃げた。罪々^{ひひ}として降る雪の中、彼は全力で逃げた。全身の筋肉が千切れそうなくらい、駆けた。彼を見た同じアパートの住人はチラツと一瞥はするものの、特に興味も湧かず、そのまま顔を戻す。ここに現代社会のある種の「いやらしさ」を垣間見えるが、この物語上それについて語るとは意義はない。そもそも彼の存在について語れば、原稿用紙5枚ほどに渡るほどのペラペラな人生ではあるし、よそよそしい隣人たちは彼のことは覚えてもない。彼の存在を知る者は家族をおいて誰もいなかった。いや、家族も彼のことを覚えていないかもしれない。彼はそれほどの人物である。閑話休題。彼は、逃げた。信じられない事実から。少し肉がついている腹を揺らし、どこにゴールがあるわけでもなし、ただ走っていた。ダッダッダッ。地を蹴る音がある。喉の奥でふえつと妙な音をあげ、意味のわからない言葉を叫んでいる。少々現実と乖離してしまったようだ。無邪気な子供のように何も考えず、走っていた。雪の積もるアスファルトというものは不思議な感触がするものだ。柔らかい層を踏み過ぎると、次には固い層が現れる。あたかも人間の精神のようであり、ダンテ提唱の「地獄」のようだ。いわずもがな彼はそのような感覚を楽しむことはしなかった。ただ逃げている。

彼がアパートからおよそ3キロメートルほど離れたときに、自身の意識を取り戻した。

「……俺は、いたい」

と言っや否や、ぞくぞくと悪寒を感じて、

「あ、ああああ、ああああ、あああああああああああああ
あああ」

彼の脳に死の前に訪れるとされる走馬灯に似た記憶の奔流が発生する。その様子はまるで攪拌され続けた濁流の流出であった。濁りに濁りきった「泥水」。それが突然彼を襲ったのだ。その「汚水」の記憶は彼をリアルに戻す。決してゲームではない。リセットボタンを押すことができない、本物の世界。……

「あれは、いたい……俺は何もしてねえ」

彼は薄着しか着ていない。部屋に帰り次第、部屋を出たのだから。だから少し肌寒い。ぶるぶると恐怖なのか寒さなのかわからないが、身体を震えさせた。

「とりあえずは、おちつけ……」

彼はどんよりとした空気の中、ポケットからシガレットケースを取り出し、煙草を一本口に咥える。ライターを探しポケットに手を入れる。これだ、と言っばやき、ジッポを手握る。汗に塗れ、走ることによって温まった手に金属特有の冷たさがヒシヒシと感じられた。彼は特にたじろぎもせず、冷静に火をつけた。不思議とライターから発せられた火は青く、その灯りは彼を落ち着かせた。

「ふう」

周りを見渡すとそこは公園だった。緑化公園。本来、緑で囲繞されているはずであったが、時刻は深夜の三時。誘蛾灯もランプもないため、真っ暗である。……。彼はこの公園にきたことはなかった。けれど、ノスタルジーを感じた。どこかで——どこか見たことがある。彼はそう思ったが、何も思い出すことはなかった。まるで記憶が制限されているみたいに。思い出す、という行動を忘れてしまった——それをイメージしながら煙草を思いきり吸う。煙が肺に送ら

れた。充滿された有毒な煙たちは自然に鼻や口から漏洩する。彼はもみあげを指先で撫でて、一息ついた。口からでる煙はヒラヒラと雪と逆の軌道を描き、天へ舞っていく。まるで神の救いのよう。

「あああ」

高いニコチンが現実を忘れさせてくれる。トリップ、陶醉、忘我。再び現実から逃走した彼は煙草の先端で踊る紫煙を見つめる。それがひとときの幻であるということは意識しない。無意識に抑圧する。その感情は繭の中で狼になり、虎になり、再発することは彼はわかっていた。目をそらした事項にわざとらしく気づくことで獣たちは襲ってくる。もう、しかたない——と思う。

「俺はやっちまったんだ、やっちまったんだろっ」

彼は、金原サトシは、自首しようと思った。

申し訳なさそうに上空に目を遣る。彼の眼にオタマジャクシのように蠢くものが目に入る。それは冷めたホットミルクの膜のような曇った空から無数の白片の乱舞であった。その寂寥感は石鹼の泡だった。すぐに弾けて消える。――

彼は人を殺したのだ。彼は覚えてなかったけれど。

部屋には女の死体があった。名も知らぬ女の死体。彼は彼女と交わりをしたあと、殺した。理由はない。人を殺したいとは思わなかった。けれど、なぜか、殺してしまった。わからない。彼は、混乱していた。同時に、あつけないものだった、と彼は思った。人の命は単純で脆弱だ、とも思う。泥酔していたからかもしれないが、女を殺したあと、何もなかったかのように会社にでかけ、今日も上司からの文句を聞きいれ、部下に愚痴を垂らした。業務が終わり、そのまま帰る。アパートのドアを開けて――そして逃げた。

雪の降る公園ですべてを思い出す。すべて——とは彼女を殺したことである。それ以外は覚えていないのだが――。天に魅入る。いつ

のまにか雪が止んでいた。神の救済は終わった。

「あ、あれ……？」

彼は体を動かすことができなかった。さながら金縛りだ。目も動かすことができない。完全なる停止。

「……？」

目の前に白い塊が浮いている。小さな小さな結晶。それは——雪だった。そう、雪は止んだのではなく、空に固着していたのだった。つまり……世界そのもの、時間そのものが、停止していたのだった。なにも動かない。風もない。動かすことができるのは彼のこころ、気持ち、精神だけであつた。意識し、考えるだけだった。

「なんだ、これは」

彼は考えた……一度——いや何回もこういうことに遭ったことがある、と内心思った。経験。この奇妙な経験を既に味わったことがある。その不思議な感覚が彼を支配する。ぐるぐるぐると彼を支配する。精液のような白濁が迫っている。まるで妖氛^{ようふん}。

「気味が悪い……でも、これで——？」

彼は、一種の終末論的考えに包まれた。終わり。終わり。終わり。そう、これで、物語は終わる。彼はぐるぐるぐる輪廻する。チヨコレートのように甘く、毛皮のように柔らかい。謎の食感。けらけらと誰かが嗤^わっている。どこか遠くで幽かに音楽が聞こえてくる。空には泥色の雲が渦巻いている。雪。雪。雪。グルグルグル。――

「え……？」

彼は動いた。勝手に動いた。コントロールはできない。右手はポケットから凶器と思われる包丁を取り出した。包丁がなぜここから……？ 彼は疑問に思う。「俺は……そうか」思い出す。すべてを……これは止められないことを知る。

「やめろ、やめろおおおおおおおおおお」

そして自らの喉に……。
グサリと。

包丁が刺さり、綺麗な鮮血が純白の雪を紅く染めた。

「それは地獄だ」「地獄」「地獄とは？」「地獄……」「地の獄」「雪は地獄か否や？」

誰かが会話している。彼は、その言葉を聞きながら、ループした。この無間ループを……。

そして物語は再び始まる。←

○

男——どこにもいるような個性の欠片もないような男——金原サトシは、自宅のアパートからつんのめるように駆け出して、逃げた。罪々として降る雪の中、彼は全力で逃げた。全身の筋肉が千切れそうなくらい、駆けた。彼を見た同じアパートの住人はチラッと一瞥はするものの、特に興味も湧かず、そのまま顔を戻す。

……飲み込まれてく。世界に。地獄に。彼は、グルグルグルと。

「これで、16784回か」

「そのとおりです」

「彼の救いはあと80億回ほどだな」

「はいそのとおりです」

「どうだカナコ。おもしろいか。この無間地獄は」

「はい。おもしろいです。金原サトシが十五年前に人を殺し、そのまま自殺。彼は私の管轄に入りました」

「……」

「彼は救いを求めていました。ですが、彼も殺人者、地獄へ落ちることが決定していました。ならば——無間地獄へ落とし、いつかは救われるように私は思いました」

「……それは同情か？」

（後書き）

冷たいからだを温めるのは儚く降り続ける白い雪なのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3028v/>

雪のリズムに囲まれた地の獄。

2011年10月9日02時46分発行